

植民地支配、キリスト教、そして異文化交流：日本軍による台湾武力制圧における事例より(一八九五年)

著者	高井ヘラー 由紀
雑誌名	日本研究：国際日本文化研究センター紀要
巻	30
ページ	109-132
発行年	2005-03-25
その他の言語のタイトル	Colonial Occuparion, Christianity, and Cross-Curtural Communication：The Case of Japanese Military Occupation of Taiwan (1895)
URL	http://doi.org/10.15055/00000627

植民地支配、キリスト教、そして異文化交流

——日本軍による台湾武力制圧における事例より（一八九五年）^①

高井ヘラー 由紀

はじめに

近代西欧帝国主義において、キリスト教は「支配者」及び「文明」の宗教であり、そこには「被支配者＝非キリスト教＝野蛮（異教）」に対する「支配者＝キリスト教＝文明」という明らかな図式が成立していた。一方、戦前の日本帝国主義においては、西欧帝国主義におけるキリスト教のような宗教は存在せず、キリスト教は「支配者」側においてもマイノリティの宗教であった。しかし、いずれの場合にもキリスト教徒は、大方において帝国主義を相対化する視点を有せず、欧米キリスト教の場合には帝国主義の「手先」となった側面が、日本のそれにおいては帝国主義に屈従的であった教会のあり方が、批判的或いは反省的にとらえられることとなった。

本稿では、そのように近代植民地支配におけるキリスト教の役割

を「教会と国家」の観点から批判的反省的にとらえる問題意識に対して、植民地支配が生み出す多文化的な状況において、キリスト教が、異なる文化及び政治的立場に属する人々の間に出会いと交流をもたらし側面に注目してみたい。具体的には、日本による台湾植民地統治が開始された一八九五年、日本軍が武力によって台湾を制圧する過程に見られた二つの事例、すなわち日本軍人キリスト教徒及び澎湖住民キリスト教徒間の交流、また日本教会より派遣された従軍慰問使及び台湾現地教会との交流に焦点を当て、植民地統治下の台湾における日本、台湾（澎湖）、英加宣教師の三者のキリスト教を媒介とした「出会い」及び「交流」の事実を描くことによって、植民地支配下における異文化交流の現実とその問題点を探ることを目的とする。

清朝末期の台湾は、漢族（閩南系及び客家系）、マライ・ポリネシ

ア系先住民族（九部族）、そして平埔族^②より構成される、多民族及び多言語地域であった。かつて一七世紀に台湾がオランダ及びスペインの植民地支配下に入った際、オランダ改革派教会及びスペインのドミニコ宣教団が先住民の間で宣教活動に従事して以来、約二〇〇年間途絶えていたキリスト教宣教は、一八六〇年の北京条約において天津条約が批准され、清国におけるキリスト教宣教の自由、台湾の淡水及び台南開港が許可されたことにより、再び開始されることとなった。プロテスタント宣教に限って見ると、南部では英国長老教会（Presbyterian Church of England）医療宣教師シェームズ・L・マクスウェル（James Laidlaw Maxwell）が、北部（大甲溪以北）ではカナダ長老教会（Presbyterian Church in Canada）宣教師ジョージ・L・マッケイ（George Leslie Mackay）が、それぞれ一八六五年及び一八七二年に台南及び淡水を拠点として宣教活動を開始した。以来、英国長老教会ミッション（English Presbyterian Mission、以下EPM）が台南に、カナダ長老教会ミッション（Canadian Presbyterian Mission、以下CPM）が淡水に設立され、両ミッションはいずれも医療宣教事業、教育事業、福音伝道事業を三本柱として、漢族及び平埔族の間における宣教活動を展開していた。

台湾におけるキリスト教宣教は清国のそれと同様、祖先崇拜が生活の中心である漢族の民衆及び儒教知識階級から強い反発を受けた

が、最初の数年間で、漢族では非知識階級を中心とした改宗者を獲得し、その後、平埔族の間で集団改宗が多く見られるようになった。一八九五年までには南部で成人信徒数一四四五人、伝道者数三〇人、教会数四四ヶ所に達した^③が、台南神学院、台南医館（後の新楼医院）、長老教中学及び女子中学などが設立され、北部でも一八九三年の時点で信徒数約二六〇〇人、牧師二人、伝道者六〇人、教会数六〇ヶ所に達し、^④オックスフォード神学院、マッケイ医院、淡水中学及び女子中学などが設立されていた。主に山地に居住する先住民族への宣教活動は南北共に未着手であった。

このように、日本統治開始当時、台湾プロテスタント・キリスト教界（以下、台湾キリスト教界）^⑤は、漢族及び平埔族を含む「台湾人」信徒及び伝道者、そして英国及びカナダからの欧米宣教師の二者によって構成されていた。教派は長老派のみであったが、教会組織は英加ミッションによるリーダーシップの下、明確に南北に二分されている状況であった。日本による植民地統治という新たな政治体制の到来による日本人キリスト教徒の参入は、言語文化的に異質な民族、長老派以外の教会、さらに宣教師と同じく近代「文明」を担い、且つ宣教師より政治的優位に立つ「帝国主義」的なキリスト教徒の到来を意味した。

この、台湾に渡ることになった日本人信徒の中で最も早く台湾に足を踏み入れたのが、一八九五年の武力制圧時に日本軍に従軍して

いたキリスト教徒、そして同年一〇月、日本軍慰問のために日本教会から派遣された従軍慰問使であった。^⑥以下、武力制圧時の台湾キリスト教界の状況をふまえた上で、これらの日本人キリスト教徒が、宣教活動着手以来、既に三〇年の経過していた台湾キリスト教界と、いかに出会い、いかに関係を築いていったのかを見ていくこととする。

一 日本軍台湾武力制圧と台湾キリスト教界

日本軍による台湾武力制圧

一八九五年、日清戦争に「勝利」した日本は、四月二十九日の日清講和条約締結により、台湾を植民地として獲得、アジア諸国の中で初めての植民地「統治者」となった。この日本による台湾の植民地支配は、武力によって台湾全島を実質的に制圧することから開始された。日本軍は、既に日清講和条約締結以前の同年三月末、澎湖を占領していたが、五月末に北白川宮能仁親王の率いる近衛師団が台湾北部への上陸を果たし、六月二日に台湾接受の手続きを正式に行つて以来、六月三日の基隆侵攻を皮切りに主要な都市を次々と制圧していった。すなわち六月七日には台北無血入城、六月一七日に始政式を行った後、西海岸沿いを南下、新竹七月三十一日、彰化八月二八日占領、以南は乃木希典の率いる第二師団と伏見宮貞愛親王の混成第四旅団が合流して、嘉義一〇月九日、そして最後に一〇月二〇

日に台南への無血入城を果たした。^⑦

この間の台湾側の動きを見ると、台湾割譲の通告を受けて以降、台湾島内の士紳階級は台湾民主国の独立宣言をもって日本の侵略に對抗することを計画、総統に台湾巡撫の唐景崧、大將軍に劉永福、副総統兼団練師に客家系台湾籍の邱逢甲を推挙し、五月二五日、台湾民主国の成立式典を挙行した。^⑧建国にあたって日本軍を迎え撃つために台湾防衛軍が再編成され、唐景崧直属の広東系部隊が台北地方に、霧峰林家の林朝棟の台湾人部隊及び邱逢甲の義勇軍が台中に、黒旗軍を率いて渡台していた劉永福が台南に配置された。しかし実際に、在台高級官僚のほとんどは内渡、富豪及び士紳の相当数が家財を持って大陸へと逃れ、唐景崧も士紳に脅迫されて辛うじて台湾にとどまっているという状態であった。^⑩民主国首脳陣のほとんどは日本軍と戦うことなく大陸に逃れていたのであり、民主国が台南府城の占領される一〇月一九日までの約五ヶ月間、持ちこたえたのは、民衆レベルで組織された義民軍ゲリラが各地で展開した武力抵抗活動の故だった。^⑪とはいえ、台湾に留まった上層階級や一般民衆も必ずしも日本の台湾領有阻止という単一の方角に結集せず、かえって兵士による社会混乱、「匪賊の跳梁」の引き起こす一種の無政府状態を恐れ、侵略者到来を望む面さえあった。^⑫

台湾教会の受難

このような混沌とした状況の中、宗教的マイノリティであり、漢族からは、既存の宗教文化をラディカルに否定する上、清国を脅かす外国勢力寄りと見られていた台湾人キリスト教徒は、それまでにない苦難の道を迎えることとなった。それまでもキリスト教徒は、日本による台湾出兵（一八七四年）や清仏戦争（一八八四年）など台湾が外部勢力からの侵略の危機に見舞われるごとに、侵略者に協力したとして、北部を中心に「スケープゴート」¹³に祭り上げられる傾向にあった。が一八九五年の日本軍による武力制圧時には、現地住民側からは日本軍協力者、日本軍からは抗日運動の扇動者と疑われるという、二重の苦難に直面しなくてはならなかったのである。

清仏戦争の記憶も新しい北部では特に被害が大きく、六〇字中二〇字の礼拝堂が占拠され、七三五名の信徒及び伝道者が死亡又は行方不明になったといわれる¹⁴。

CPM宣教師の報告によると、六月七日の日本軍による台北無血入城以降、キリスト教徒は日本のスパイと疑われ始め¹⁵、七月二三日の時点で既に、数名のキリスト教徒が抗日勢力に加わることを拒んで惨殺されている。抗日感情の特に根強い客家の街、月眉では、武装抵抗を拒否した伝道者の家族や親戚が殺害され、東海岸地域でも日本軍の協力者であると誤解されたキリスト教徒が危うく漢族秘密結社による集団虐殺を免れるなど、被害は相当に拡大していた¹⁶。

日本軍関係者にもキリスト教を嫌悪する者は多く、桃園、中壢、新店、錫口、頂双溪などの各地の礼拝堂が軍に占拠されて馬小屋などとして使用されたほか、伝道者が投獄、拷問され、しばしば処刑されるまでに至った¹⁸。伝道者投獄の名目は抗日運動の扇動ということであったが、多くの場合、キリスト教への日頃の反感に加え、抗日勢力への参加に消極的なことへの腹いせから、住民や抗日兵士が日本軍へ密告したものであった。

一方、南部における教会被害は北部と比較すれば規模はかなり小さかったものの、同様の傾向はやはり見られた。打猫（民雄）における教会関係者三名の殺害（九月初旬）、麻荳におけるキリスト教徒の集団虐殺（一〇月中旬）、また東海岸観音山における平埔族キリスト教徒の集団迫害（翌一八九六年二月中旬）などのケースが、EPM宣教師によって報告されている¹⁹。いずれもキリスト教徒が日本軍の協力者であるという疑惑から、周囲の住民や「暴徒」と化した清朝兵士によって殺害されたものであった²⁰。

南部において北部と大きく異なっていたのは、キリスト教徒が抗日ゲリラ戦の鎮圧において「信頼できる」と知った日本軍が、彼らを強制的に徴用するようになっていた点である²¹。これは日本軍による教会関係者への迫害を軽減する一方、住民の間に「キリスト教徒は日本軍の協力者」との誤解を広め、キリスト教徒を窮地に陥れることになった。この弊害の典型例である「麻荳事件」では、澎湖島

馬公教会の伝道者林赤馬が、日本軍から麻苳の道案内を強制され従わざるを得なかったために、現地のキリスト教徒一四名（及びその友人四名）全員が抗日ゲリラにより殺害されるという、悲惨な結果となった。⁽²³⁾

武力制圧への無抵抗

以上のような台湾人キリスト教徒受難の原因として、抗日武力抵抗に対する消極的態度という点を指摘できる。キリスト教徒は抗日軍に加わらなかったのみならず、日本軍を積極的に迎えさえした。台北においては北部長老教会の代表的人物である李春生が、台南においてはEPM宣教師らが、日本軍による無血占領に介入したことは後述する通りであるが、その他にも、北部では頭圍や雲材街⁽²⁴⁾、南部では牛担湾で、キリスト教徒が積極的に日本軍を迎えようとしたことが報告されている。⁽²⁵⁾ もっとも、住民のゲリラ抵抗を恐れていた日本軍は相手構わず掃討作戦に出る傾向にあり、善意が仇になって返ってきたことも少なくなかった。牛担湾では、出迎えた三名の住民が一斉射撃を受けて惨殺された。日本軍を迎えた北部のある平埔族キリスト教徒の村でも、伝道者を含めた住民が虐殺された例が報告されている。⁽²⁶⁾ このような日本軍による掃討作戦の残虐さは、しばしば一般の台湾住民の間に抗日意識を植えつけるきっかけになったが、キリスト教徒の場合、掃討作戦の犠牲になった恨みから抗日に

転じた事例は見当たらない。

日本統治下の台湾において、キリスト教徒と抗日運動を担う層とがこのように異なっていたことは、同じく日本による植民地統治下にあった朝鮮において、キリスト教徒が抗日ナショナリズム運動に関わる側にあつたことと対極をなしている。台湾人キリスト教徒が、少なくとも統治開始当初、抗日運動に対してかくも消極的だった理由は何だったのかという疑問が、当然、浮かんてくる。

まず、台湾では、明に至る中国の各王朝から長く辺境視され、清初も一六八三年の平定に至るまで、スペイン・オランダ勢力の進出、次いで三藩の乱に加担した鄭氏政権の占拠を受け、さらに全島規模の台湾省が画定されるのが一八八七年であつたという背景から、全島を統一する明確な政治的アイデンティティの成立が遅れていた、という事実を指摘したい。日本人信徒の接した台湾人キリスト教徒も、清国への国家的愛慕などはなく、むしろ国姓爺（鄭成功）を慕っていたと報告されているが、清王朝の下で政治的圧迫及び経済的搾取を受けてきた台湾の一般民衆は、新たな統治者である日本にむしろ期待する向きさえあつた。したがって、日本統治の開始が武力を用いてまで抵抗に価するものかどうかについて、台湾の民衆全体が共感し共有する見解や感情は、必ずしも一つではなかったといっている。また台湾においては、「ナシヨナリズム」と「抗日」とが朝鮮の場合のように直結していなかったことも指摘しておきたい。

これは、一九二〇年代以降の台湾において、インテリ青年層を中心に展開された政治運動が、あからさまに「抗日」の性格を有するものではなかったことにも反映されている。

さらにキリスト教徒は、漢族であれば自らの属する宗教社会から断絶された存在であり、そうでなければ民族的マイノリティの平埔族であって、一般の漢族系住民とは心理的に隔てられていた。したがって、一部の漢族住民が抱いていた強い抗日感情を共有する素地がなかったともいえる。武力戦闘行為自体にも少なからず抵抗があったであろうし、宣教師との接触が欧米列強のみならず日本を含む「外国」への抵抗感を小さくし、日本が「近代」国家であることに期待する側面もあったと考えられる。

また、キリスト教徒が結果として積極的に日本軍を迎え入れた理由としては、日本軍を誘導することによって、村全体を被害から救おうとする行動原理として説明できるであろう。それは日本統治に対する歓迎の意図というよりは、今でこそ「政治的妥協」とも思える行動によって自分の属する村落共同体を救うことを、「政治的抵抗」によって人命の犠牲を払うよりも望ましいと判断した結果の行動であった。

このように、宗教的民族的マイノリティを含む台湾民衆全体を包括する政治的アイデンティティが未だ構築されておらず、「抵抗」の母体や動機も流動的なものであったことが、台湾キリスト教徒を

して日本軍による台湾占領の平和的実現を促進する側に立たせたと結論付けられよう。

台北及び台南無血入城とキリスト教徒

以上のように、台湾各地のキリスト教徒は全体として抗日武力抵抗に消極的であったが、それに加えて、台北においては北部長老教会の代表的人物である李春生が、台南においてはEPM宣教師らが日本軍による無血占領に介入したことは、台湾キリスト教界の立場を典型的に示しているといえよう。

北部カナダ長老教会大稻埕教会の信者で富豪の茶業商（洋商）李春生は、後に日本基督教会の台湾における働きを、経済面を含めて全面的にバックアップすることになった人物である。一八三八年廈門に生まれ、茶業商を営み、六五年渡台後国際市場における台湾茶の販売で成功を収め、七五年以降は清国の役人、七八年からは台湾の三大郷紳の一人である林本源家の林維源と共に台北城の建築委員を任され、台北大稻埕に建昌街、千秋街、六館街を建設、八九年にも台湾鉄道鋪設委員を務めるなど、台湾および台北城の建設、近代化及び治安維持に最も重要な役割を果たしていた士紳の一人であった。²⁸ 廈門時代から外国人との接触が比較的多く西洋文化に親しんでいた李は日本の明治維新を高く評価し、一八七四年牡丹社事件における日本の台湾出兵の際、清朝は台湾確保のために朝鮮を手放すべ

きこと、中国の向上（自強）は台湾から開始すべきことなどを主張するなど、在台の漢族として最初に「変法自強」⁽³⁰⁾を唱えた近代化志向の人物であった。⁽³¹⁾

この李春生を含む台北の士紳が、日本軍による占領を手引きするに至ったのは、六月二日の清国代表李經芳と初代台湾総督樺山資紀の台湾接受手続き以降、基隆が侵攻され、唐景崧が逃亡すると、「敗残兵」が台北になだれ込んで城内を混乱に陥れたためである。彼らは城内の治安を保つため、六月六日に行商人辜顯榮を基隆に派遣して日本軍に入城を懇請、また米国人従軍記者デイヴィドソン（James Davidson）ら外国人居住者も日本軍を訪ねて早急の進駐を要請した。⁽³²⁾日本軍はこうして六月七日に無血入城を果たし、同月一七日に始政式を挙げたのである。

李は一五歳で入信した敬虔なキリスト教徒であったが、台北城に日本軍を招請した行為自体は、キリスト教よりも、むしろその近代化志向と台北を代表する士紳としての責任感に由来すると思われる。社会秩序の安定、財産の保障、貿易発展の機会を常に優先的に考慮する貿易商人としての行為との解釈もある。⁽³³⁾ただし、もとより日本の明治維新を高く評価していた李は、明治維新後の日本がキリスト教のみを信奉するようになったと一時は誤解するほどに、日本における近代化とキリスト教の一体性を信じていた側面もあった。⁽³⁴⁾したがって日本統治到来に対し、近代化及びキリスト教化双方の側面か

ら強い期待を有していたことは、事実であろう。⁽³⁵⁾李は後に、統治初期より台湾総督府に多大な協力を提供したことを評価され、勲六等に叙し、旭日章を授与されている。⁽³⁶⁾

唐景崧逃亡後の台北城内が混乱に陥ったと同様、台南でも「抗日戦の象徴的存在」となっていた劉永福が一〇月二〇日廈門へ逃亡した後、城内の旧清国兵が「略奪」や「乱暴」を始めたが、商人達は台北のような混乱に陥ることを避けようと、EPM宣教師トマス・バークレー（Thomas Barclay）及びダンカン・ファーガソン（Duncan Ferguson）らに日本軍の入城を案内するよう懇請した。これに対して両宣教師は二〇日夜、第二師団長乃木希典と会見して事情を説明し、それによって第二師団は二一日に台南無血入城を果たした。⁽³⁷⁾しかし、EPM宣教師は何の迷いもなくこのような行動を起こしたのではない。⁽³⁸⁾バークレーの報告によれば、彼は上述の麻豆事件の直後でもあったことから、商紳の要請に対し「キリスト教徒は既に我々が日本軍と同盟しているという噂によって大きな被害を受けており、これ以上この件に関わりたくはない」と、最初は拒否した。しかし、商紳自身が日本軍の速やかな入城を要請する請願書に、一〇〇名以上の署名を添えて宣教師のもとに持ってきたという経緯により、台南府城の人々と日本軍との仲介役を果たしたのである。こうして日本軍を台南府城に導き入れたバークレー及びファーガソンは、その功績を評価され、後に勲五等の勲章を与えられた。

この宣教師の行動は、一方では、台湾総督府に対して宣教師をはじめとする台湾キリスト教界について肯定的な印象を与え、初期統治当局とミッションの間に一種の信頼関係を生み出した。しかしもう一方でこの行動は、一部の台湾住民の間でキリスト教徒が日本と同盟関係にあるという疑いを一層強めさせることになった。翌年二月に東海岸観音山において発生した平埔族キリスト教徒への集団迫害は、彼らを日本軍の手引きと誤解した地元住民によって引き起こされたものであった。

在台英加宣教師の日本統治に対する立場

日本統治到来以前の英国及びカナダ宣教師はいずれも、欧米列強の清国に対する政治的優位を盾に宣教活動を進めることが最良ではないことを経験上わきまえており、問題発生の際には清朝当局に解決を陳情していたが、その対応姿勢や、宣教活動に干渉しさえする態度には強い不満を感じていた。したがって、「近代国家」の姿をまとい始めていた日本が宣教活動上の新たな交渉相手となったということは、彼らの間に多少とも安堵の感をもたらした。

EPM関係者にとつての肯定的感情の最大の根拠は、日本が近代化を経た「文明的」な国家であるという点であった。台湾割譲直後に個人的見解を示したジョージ・イード (George Ede) は、建設、産業、法律面の改善に加え、日曜の休日制定、キリスト教機関の正

式認可などの面で、肯定的な変化がもたらされるであろうと予想している。⁽⁴⁰⁾ バークレーも一八九五年末の報告で、日本統治の良否について判断を下すには時期尚早としつつも、清朝官僚制度や知識階級の崩壊は、宣教活動上の障壁を取り除くであろうと指摘⁽⁴¹⁾、翌年にはウィリアム・キャンベル (William Campbell) が、日本はたとえキリスト教国でなくとも、教会に対してはキリスト教国同様の寛容を、阿片に対しては非寛容を実践するだろうとの希望的観測を述べている。⁽⁴²⁾ 駒込武が指摘するように、EPM宣教師にとつては、キリスト教布教の「障碍」であった「読書人層を担い手とする中華文明」よりも、「いち早く西洋近代文明に『改宗』した日本の支配体制の方がはるかに布教に適合的」であると判断され、「形式的な意味での西洋化が評価の対象となった」結果といえる。⁽⁴³⁾

しかし、宣教師にとつてあくまでも「異教国」である日本による統治の到来は、全面的に肯定されていたわけではない。バークレーは上記の報告において、日本統治の目的は「台湾人を身も魂も心も日本人にすること」であると、問題の核心を鋭く指摘し、日本統治下の政策を注意深く見守っていく必要を示唆していた。⁽⁴⁴⁾

一方CPMは、台北占領直後に、近代化を経つつある「ミカド」の帝国である日本の統治により台湾は「文明」の恩恵に与るだろうとの楽観的観測を示しているものの、それ自体が宣教上の助けになるといった安易な結論は出していない。⁽⁴⁵⁾ マッカーイも、差し当たって

の問題は北部教会の受難であるとして、それまで同様に「嵐の最中に神の声を聞き取る強い信仰をもって」直面するだけだと述べ、日本統治に対する期待は表明していなかった。⁽⁴⁶⁾しかし一八九六年八月に水野遵民政長官、一月に乃木希典総督と会見し、宣教活動及び台湾教会の保護を直訴する機会を得、その好意的な対応に明らかに好感を抱いた。⁽⁴⁷⁾水野や乃木の側でもマッカーイの人格に感銘を受けたとみえ、その後、マッカーイを訪問したり、総督邸晩餐会に招待したりしている。⁽⁴⁸⁾もとより、「天皇」と「キリスト」の両方に忠誠を尽くすべきことを信徒に説いていたマッカーイであったが、⁽⁴⁹⁾総督府高官から好意的な扱いを受けた結果、「天皇」に象徴される植民地統治権力に対して、彼自身が肯定的感情を抱くようになったとしても、不思議ではなかった。

二 日本軍人キリスト教徒と澎湖キリスト教徒

一方では、日本統治の到来により多大な苦難や緊張を強いられた台湾教会であったが、そのような中でも意識されていたのは、日本軍に従軍するキリスト教徒との接触、そして彼らを通して見えてくる日本及び日本キリスト教界への関心であった。台湾民衆の敵味方を区別できず、しばしば女子供をも無差別に殺戮した日本軍と⁽⁵⁰⁾台湾民衆との間を、恐怖、猜疑心、敵愾心、恨みといった否定的な心情が深く隔てる中、台日キリスト教徒同士の間一種の「信頼」関係

に基づく交流が見られたのは興味深いことである。ここでは台日信徒が互いに近づく上での外的条件が例外的に整っていた澎湖において見られた、聖職者を媒介としない信徒同士の交流の事例に焦点を当て、その出会いの経緯と交流の結果構築された関係性、そこに内包されている問題を検討したい。⁽⁵¹⁾

台湾島のすぐ西に位置する澎湖諸島は、南部台湾教会が外国ミッションの援助なしに宣教を行った最初の地域であり、一八八二年澎湖島の南端馬公（当時「媽宮」）に小さな礼拝堂が建てられ、少数の信徒を有していた。歴史的に戦略的価値が高く、清国にとっても前線のな地域としての役割を果たしてきた澎湖は、日清講和条約締結に先立つ一八九五年三月二六日、比志島支隊によって占領され、それに伴って馬公礼拝堂も軍に占拠されることとなった。島の北端に避難していた信徒は、平定後馬公に戻って日本軍に礼拝堂の返還を求め、その願い出を即座に聞き届けられて、恐らく四月中旬頃には礼拝を再開することが可能になったものと思われる。⁽⁵²⁾この過程において信徒のための便宜をはかったのが、岡田哲蔵というキリスト教徒の陸軍歩兵中尉である。⁽⁵³⁾澎湖のキリスト教徒はこのことをきっかけに、比志島支隊の大方が北上する六月三日に至るまで、日本軍中のキリスト教徒と交流関係を持つこととなった。⁽⁵⁴⁾

約一万八〇〇〇人の澎湖駐在日本軍人及び軍夫の内、キリスト教徒は二〇名ほどおり、岡田のほか、日本の軍人伝道に大きな影響

を与え、後に東亜伝道会を組織した日足信亮（日本基督教会員、當時軍監督補）も含まれていた。これらのキリスト教徒は教派を超えた信仰の集まりを形成していたが、馬公礼拝堂において礼拝が再開されて以来、日足を含めた数名が日曜礼拝や木曜晩の祈禱会などに参加し始め、そのうちに日曜日午後と同礼拝堂において独自に日本語の礼拝を行うようになった。⁽⁵⁶⁾そこには日足と岡田のほか、宮田（軍医）、田淵（軍曹）、その他兵士を含めて一五名から二〇名ほどの日本軍中の信徒が集い、牧師である第一二連隊附酒保長の奈須義實が説教を担当した。⁽⁵⁷⁾

こうして午前中には台湾語礼拝、午後には日本語礼拝が行われるようになり、澎湖の信徒が二〇数名、日本の信徒が一〇数名、全員で四〇数名が礼拝に参加していたが、言葉が通じないにもかかわらず、互いの礼拝に出席するという状況が生まれていた。⁽⁵⁸⁾この交流において澎湖信徒側で重要な役割を果たしたのが、「台湾省台南府大挙助教授」で澎湖島頂上赤嶺社出身の秀才、許廷芳である。許廷芳は旧正月の休暇を過ごすために澎湖に戻ったところで予想外の騒乱に巻き込まれ、台南へ戻れなくなったのみならず、程なく大学も閉鎖されたため、数ヶ月間澎湖に留まり、伝道者不在の馬公教会とその信徒のために便宜をはかっていた。白話ローマ字台湾語⁽⁵⁹⁾以外の文字を読めない信徒の多い中、許廷芳は漢字を通して日本人信徒と筆談することが出来、それによって両者の意思の疎通が可能になった

のである。⁽⁶⁰⁾

日本軍中のキリスト教徒は、初めて接する台湾教会に対して率直な関心を抱き、台湾人信徒の熱心な信仰に感心し、終始丁寧な態度で彼らに接する一方、⁽⁶¹⁾「文明の軍隊」として、また「文明的」キリスト教の信徒として、自らの文明的優越性を標榜して止まなかった。そのような優越感を示す例として、日清講和条約締結後の五月五日日曜日に行われた日台の信徒大親睦会において、日足信亮が澎湖の信徒三〇名と日本人二〇名を前に行った演説を見てみたい。

日足によると、日本が日清戦争において勝利を得たのは「一九世紀下半の文明大潮流に棹して後れず、善を取り悪を捨て、……而して後に国民の一致」が得られたためである。そこで台湾（澎湖）人民は清国を見習うことなく、「大いに新文明に生活するの覚悟」を持ってもらいたい。しかし日本の文明も完全なわけではなく未だ発展中である。澎湖の住民は、武力占領によって一時は苦境に陥ったかもしれないが、「不幸の後に来るべきは幸福」であり、「皇軍」は「博愛一視同仁」であるから、その下に「意を安んじて」ほしい。最後に「余等主にあるの友此地に卿等と相会す幸大なりと云ふべし」と締めくくられている。⁽⁶²⁾

この、いささか一方的な日足の演説に対し、澎湖信徒は驚くべきことに、「男女老若を問わず総起立して日本人の博愛を説きて止ま」なかった、と肯定的な反応を示したとされている。果たして演説の

内容が伝わった結果であったのか、疑問を感じるところである。一方、答辞を述べた許廷芳は、「我等信徒少数にして力たらず、先生大人等の助力を得て大に本島の為めに働きたいと、澎湖の伝道における主役はあくまでも澎湖信徒自身であることを示唆しつつ、日正の言葉に多少距離をおく形で、日本人信徒の協力を要請した。⁽⁶³⁾澎湖人民は文明的な「皇帝」の博愛のもとに「安んじて」いれば良い、という日正の消極的理解に対して、日本軍の政治的優位性を澎湖信徒および教会の活動に利益をもたらすものとして、ある種積極的に受けとめた許廷芳の理解の間には、明らかな隔たりが見られる。後述するように、両者は表面的には相互に意志を伝達しているように見えるが、深層においては完全に「擦れ違」っていたのだといえる。

日本軍人の文明主義的意識を示すいま一つの興味深い例として、澎湖駐在の日本人クリスチャン将校がEPM宣教師パークレー宛に送付し、英国長老教会機関誌『メッセンジャー』に掲載された書信がある。以下、その一部を引用する。⁽⁶⁴⁾

馬公 一八九五年五月一二日

親愛なる“Pa Tohma”（パークレー氏の中国名）牧師殿

貴方のことを許廷芳氏よりお聞きし、この手紙を送ります。

私は日本軍の若い将校（予備役）です。東京青山のメソヂスト

高等学校「青山学院高等普通学部」で教育を受け、数年前クリスチャンになった主にある貴方の兄弟です。この戦争の勃発は遺憾にたえませんが、私たちが戦うことは必然の結果でした。この戦争には、東洋の国々が古い文明を捨て去り、新しい精神的な文明を吸収するに至る神の導きが働いていることを、私は信じています。私は日本に与えられた神聖な使命を確信しており、己の義務を果たすためこの戦争に従軍しました。

今や戦闘は終結し、私たちは澎湖におります。先のことばかりですが、今は現地の漢人信徒を助けることに尽力しています。彼らは私たちと共に“Jee Pai Tang”（チャペルの中国語）「礼拝堂」において日曜礼拝を守っています。

当支隊にクリスチャンは多くありませんが、主の偉大なる真理が、世界の中のこの地において明らかにされて中国及び隣国地域の暗闇を照らし、神の国の到来を早めることを、主の御名の下に一つに集まって切に祈っているのです。……（中略）

……東洋には新時代が到来し、神を信じる我々には偉大な使命が待っている。

主にありて

××将校

（「」内は翻訳引用者による補足）

(原文)

"Makung, May 12th, 1895.

"Rev. Pa Tohma (Mr. Barclay's Chinese name).

"Dear Sir,

"As I heard of you from Khaw Teng-hong, I write you this letter. I am a young officer in the Japanese Army (Reserves). I was educated in a Methodist School at Aoyama, Tokyo, and became a Christian some years ago. I am your brother in the Lord.

"I am sorry that this war broke out. But it was a necessity that we should fight. I believe that there is a Divine guidance in this war, which leads Oriental nations to leave their old civilisations and seek the new and spiritual one. I believe firmly in the Divine Mission of Japan, and I fought this war to fulfil my duty. Now the battles are over. We are here in Pescadores. We do not know what will be our future. But at present we are doing our best to help the Chinese Christians in this place. They are keeping their Sunday Services with us in the Lee Pai Tang (the Chinese word for Chapel).

"We Christians in this detachment are not many. Yet we made ourselves into one body in His name, and we earnestly

pray that the great Truths of the Lord might be revealed in this part of the world, and strike into the dark bosoms of China and her Continental neighbours, and thus quicken the day of His kingdom.

"..... A new era has come for us in the Orient. Great duty lies on us who believe in God.

"Sincerely yours in the Lord,

"LUEUT."

この、使命感に満ちたメソジスト派の将校は、日清戦争が「東洋の国々が古い文明を捨て去り、新しい精神的な文明を吸収するに至る」ための「聖戦」であり、従軍は「己の義務を果たす」ことだと信じて疑わなかった。当時の日本キリスト教界における日清戦争理解の典型といえる。

この書信を通して、日本軍人キリスト教徒との最初の出会いを経験した宣教師バークレーは「もしも日本人の多くがこのような精神で戦っていたのなら、中国人が彼らの前に敗北したのも不思議ではない」と肯定的に反応、『メッセンジャー』誌編集者も、「雄々しく愛国的且つ敬虔である」と書信の内容を評価している。「異教」としての日本には懐疑的でも、「キリスト教—文明—帝国主義」を標榜する日本に対しては批判の視座をもたない英国長老教会の立場が、

ここに示されているといえよう。

このように、「文明国」日本のキリスト教徒としてのナイーブな優越意識、及び戦勝者という政治的優位性によって自己規定していた日本人信徒に対し、澎湖信徒側は、上記の日正の演説への反応からも見て取れるように無条件に好意的とも取れる態度で対応した。或いは、岡田や日正らが礼拝堂返還や教会保護のために便宜をはかってくれたことに恩義を感じてのことかもしれない。日本側の信徒が、白話ローマ字表記の聖書や賛美歌に関心を示し、その購入を希望した⁽⁶⁵⁾ことに對しても、許廷芳を含め澎湖の信徒らは、自らは生活の困難や教会の物資不足に悩まされているにもかかわらず、EPM本部に日本人信徒のために聖書や賛美歌を要請していた⁽⁶⁶⁾。

確かに、澎湖住民の大多数が、日本軍関係者による被害を受けて否定的感情に支配されていたことを考えれば、馬公教会関係者が日本軍中のキリスト教徒の協力によって保護され、両者の間で信頼に基づく親交関係が築かれたのは、キリスト教信仰という共通の要素なしには起こり得なかった出来事ではあった。そのような側面を認めつつも、澎湖信徒が明らかに援助を必要とする苦境に陥ったのは、日本軍そのものによってであったこと、にもかかわらず日本人信徒の「協力」を受けた澎湖側が「感謝」するという上下構造が日本人側によって規定され、さらに澎湖住民がそれを甘んじて受け入れていたことを見るとき、両者の関係はキリスト教を媒介とするもので

ありながらも、不均衡な政治的力関係に強く支配されていたと指摘せざるを得ない。

この「関係の不均衡さ」が端的に示されているのが、五月二日木曜日、日本人信徒が日清戦争勝利に対する「感謝会」を馬公教会において挙行した後、澎湖信徒二〇余名と共に教会堂の前で行った記念撮影である⁽⁶⁸⁾。なぜ澎湖信徒と共に写す必要があったか。上述のクリスチャン将校は書信で「両国民 (both nationalities)」のキリスト教徒による記念撮影と述べているが、⁽⁶⁹⁾実際にはこの撮影は、日本人が戦勝者、澎湖住民が敗北者と、日本人が統治者、澎湖住民が被統治者と、さらに両者が同じ国家に属する国民であると規定されたことを、象徴的に「記念」していたのではないだろうか。文明の「義」を信じ、日清戦争勝利を「感謝」していた日本人キリスト教徒にとって、日清講和条約締結を経て台湾及び澎湖が正式に割譲されたということは、両キリスト教徒間の関係を構築する上での「義」なる政治的前提だったのである。

しかしもう一方の澎湖側からすれば、この撮影は、今後の統治において日本人キリスト教徒が何らかの意味で自分達に利益をもたらすことを保証する「しるし」だったのではないだろうか。日本人キリスト教徒への好意的な態度にも、清朝を近代文明の力で圧倒した日本という新たな支配者の到来に際し、たとえ「感謝」する側に「下ったとしても」、「キリスト教」という共通項を通して統治民族との

関係を築いておくことにより、将来的な保証を確保しようとする政治的知慮が、全く働いてなかったとはいえないだろう。そのように考えると、日本人―澎湖（台湾）信徒の関係は、あからさまに「不均衡」であったのみならず、両者の思惑が相互に噛み合わずに存在するという、「擦れ違い⁽⁷⁾」という側面をも有していたといえる。

両者の交流に関する報告記事を『基督教新聞』に書き送っていた浅野源二郎（翻訳官、日本組合基督教教会信徒）は、澎湖信徒との出会いに際し、最初は宣教師の伝道の働きに感銘を受けていたが、現地信徒が清朝への「国家愛」を持たずむしろ国姓爺（鄭成功）を慕っていることを知るにつれ、「島民の精神の発暢」のためにキリスト教信仰と共に「忠臣愛国の心」を教えない宣教師に、不満を感じるようになったことを述べている。⁽⁸⁾清王朝による「封建的家族的」統治を受けてきた人民に対し、明治維新以降の日本人同様の「愛国心」を要求するのは、確かに筋違いであっただろう。⁽⁹⁾しかし、この浅野の指摘は、いみじくも、澎湖（台湾）―日本人信徒間の「擦れ違い」の本質を突いているともいえる。それは、天皇制を通し「国家」を絶対的服従の対象とする日本人キリスト教徒のメンタリティーと、移り変わる統治者を甘受しつつ、その「国家」体制から権益を受けようとする、台湾（澎湖）キリスト教徒のそれ、の決定的差異からくるものであった。この背景として、土族を中心とするエリート層によって構成されていた明治初期の日本人キリスト教徒の極

めて国家主義的な性格、それに対して、台湾人キリスト教徒が主に非知識階級の漢族や民族的マイノリティである平埔族によって構成され、例えば台湾民主国を標榜した漢族系台湾人エリートとも一線を画す存在であったこと、なども考慮されなくてはならない。しかし、この差異の分析に関しては、別稿にゆずることとしたい。

三 従軍慰問使と台湾キリスト教界

以上のように、占領の過程で日本軍が住民の抵抗をほとんど受けず、軍の駐在期間がほぼ平穏に経過した澎湖において、現地住民―日本軍人キリスト教徒間の交流が見られたのに対し、抗日武力活動の盛んだった台湾本島においては、日本軍と現地住民、現地住民と現地キリスト教徒、日本軍と現地キリスト教徒間の関係が極度に緊張し、日本軍人キリスト教徒と台湾教会とが容易に接触できる状況ではなかった。そのような中、日本の戦時軍人慰問会⁽¹⁰⁾によって既に一八九五年五月頃決定されていた台湾への従軍慰問使派遣が、候補者の絞り込みや大本営への派遣出願などを経て実現し、日本基督教会の細川瀾、日本バプテスト教会の吉川龜^{ひがし}、そして日本メソヂスト教会の武田芳三郎の三名が、一〇月四日に台湾基隆に到着し、それぞれ一―二月末より一―三月末まで台湾に滞在することとなった。

従軍慰問使渡台の目的は、第一に在台日本軍の慰問であり、一―二ヶ月間に亘る台湾滞在の大方は、各兵站駐在の諸隊訪問、病院訪

問、慰問状の贈呈、慰問の辞を呈すこと、慰問演説、などの活動に費やされた。しかし台湾キリスト教界にとって日本の教会を代表する存在でもある彼らは、慰問活動の傍ら在台宣教師、台湾人伝道者や有力信徒らの歓待を受け、現地教会との交流を持つ機会を得た。

中でも細川瀏はバークレー夫妻と個人的に親交を深め、共に南部台湾の伝道拠点を訪問したほか、単独でも精力的に現地教会との接触をはかることにより、日本および台湾キリスト教界の橋渡し役ともいえる重要な役割を果たした。こうした台日（含ミッション）双方の聖職者の仲介を通して台日信徒交流の場も生まれ、これらの聖職者同士、及び聖職者を通じての信徒間交流は、その後の台日両教会間の正式な関係構築の起点となっていた。

以下、細川の行動に焦点を当て、台湾キリスト教界との交流の軌跡を追うと共に、その意義と問題性とは検討したい。

細川は一〇月四日の台湾到着後、武田及び吉川らと分かれ、南進軍に随従して日足信亮と共に澎湖へ渡った。⁽⁷⁷⁾ 枋寮より東港を経て一〇月二八日台南に至り、武田らと一時合流。その晩病に倒れ、看病を受けるためバークレー宅に約二週間滞在、その間台南におけるキリスト教の諸集會に参加した。海路で北上した武田らと再び分かれ、バークレー夫妻の南部教会巡回旅行に同行して陸路で北上。日本軍の慰問に当たる傍ら、牛担湾、嘉義、雲林、彰化、岸裡大社各地の教会を訪問し、岸裡大社教会では二名に洗礼を授けている。⁽⁷⁸⁾ バーク

レーと別れた後、新竹を経由して一一月二八日台北へ。李春生やマツカイらと知り合い、一二月一八日基隆より台湾を離れた。

細川の行動の特徴は、行く先々で現地教会に足を踏み入れ、筆談や英語を用いて積極的に教会関係者と交流しようとする意志と、必要とあれば慰問使という立場を利用して、現地教会のために統治当局と交渉し、助力を惜しまない精神にあった。台湾教会のために便宜をはかった最初の例は、日本軍の道案内を命じられて窮地に陥っていた馬公教会伝道者林赤馬を、その任務から外すための軍との交渉であったが、これは力及ばず、数日後に麻荳事件が引き起こされる結果となった。⁽⁷⁹⁾ しかし、それ以降は大方において功を奏し、東港では信徒が自由に礼拝を挙行できるように取りはからい、⁽⁸⁰⁾ 台南ではバークレーに助けを求めにきた木柵平埔族信徒の窮状を乃木に陳情して解決し、⁽⁸¹⁾ 新竹では反乱者として密告された信徒を救済したほか、⁽⁸²⁾ 麻荳事件及び打猫事件の善後策の要請、⁽⁸³⁾ 宣教師巡回旅行のための旅行免状の申請、⁽⁸⁴⁾ 宣教師の総督会見の交渉、⁽⁸⁵⁾ などの方面でも尽力した。細川はまた、日足の協力もあって、自身がいわばコーディネーターとなって軍人及び民間日本人キリスト教徒を動員し、日本人対象の礼拝を司ると共に、台湾教会信徒との合同の集會や交流の機会を催した。

台南における一一月一〇日の日曜礼拝では、約一〇〇名の礼拝出席者中、「日足監督補、原田軍吏、久来島上等兵、関西学院生徒岡

某氏外に信徒の兵士一名」及び細川を入れた六名もの日本人キリスト教徒が参加した。日足は礼拝後に日本人出席者を代表して所感を述べたが、それは細川が英語に、パークレーが台湾語に訳すという形で、現地信徒に伝達された。⁽⁸⁶⁾ 翌週日曜日の十一月十七日には、嘉義教会で通常の日曜礼拝の後に日本人のための礼拝が執り行われた。会衆五〇―六〇名の内、細川を含めて七名の日本人が参加していたためであった。⁽⁸⁷⁾

日本人が多く滞在する台北に到着して以降は、さらに積極的に日本人を動員して礼拝や祈禱会を行った。二月一日日曜日の午後は、大稻埕教会において日本人礼拝を挙行したが、見物のために来た台湾人六〇―七〇名に対し日本人の集会参加者は一〇名に過ぎず、「甚だ物足らぬ心地を催はさしめられたり」と不満であった。⁽⁸⁸⁾

二月四日には、日台信徒合同の祈禱会を開くべく、入院中の信徒大友安吉、北門街の手塚八百吉、兵站監部の日足及び原田、総督府内の中田徳太郎及び田崎銅太郎らに声を掛け、初対面のマッカーイと協力して、艋舺教会において合同祈禱会を実現させた。参加者は台湾人一三〇―一四〇名に対し日本人一三―一四名であった。⁽⁸⁹⁾ さらに八日日曜日、同教会において午後日本人礼拝を司ったが、これには原田、郷軍吏のほかに約二〇名の日本人、そして四〇―五〇名の台湾人が出席した。⁽⁹⁰⁾ こうして、艋舺教会において二度に亘り日本人対象の集会を開いたことは、後に台北における日本人信徒が独自に

教会を設立するまでの間、マッカーイに協力を依頼したり、艋舺教会を借りて礼拝を行うきっかけを作った。

さらに細川は、在台ミッションと同じ長老派である日本基督教会の牧師として、在台宣教師及び現地教会に対して日本の教会を代表する存在でもあった。嘉義教会執事から日本教会に贈られた挨拶は、帰国後に各地の演説会で伝達され、岸裡大社教会の会衆から託された日本基督教会宛書信は戦時軍人慰勞会に交付、後に『福音新報』に掲載された。⁽⁹²⁾ また、細川の日本基督教会に対する報告は、台湾のキリスト教事情や日本人伝道の必要性に関する確な判断を与え、日本基督教会が他教会に先駆けて在台日本人伝道に着手する一因となった。

最後に、細川とパークレー及び李春生との友情にも触れるべきであろう。一〇月二八日午後、初めてパークレー夫妻を台南に訪ね、「実にも気高き親切な人々よ」との好印象を抱いた細川は、病に倒れ夫人の看病を受けるといふいきさつがきっかけで、夫妻との親交を深めることとなった。十一月二日―二十四日にはパークレー夫妻に同伴して台湾を北上したが、それは「実に幸福なる旅路」であり、「父母骨肉と別るゝが如き離愁」をもって別れたと、細川は述懐している。⁽⁹⁴⁾ パークレー夫妻の側でも、細川が自宅で療養したことや旅行を共にしたことについて、「彼の滞在を大いに楽しんだ」「非常に気持ちのよい同伴者であった」との好印象を持った。⁽⁹⁵⁾

細川はまた、台北では十一月三〇日に李春生の家を訪ね、「実に円熟せるクリスチアンにて一見人をして高德の紳士たるを感ぜしむるの人格者」との印象を抱き、その後三度に亘って彼を訪問した。⁽⁹⁵⁾特に李邸の昼食に招かれて優遇歓待を受けた一二月一〇日には、李の人となりを深く知る機会を得、「クリスチャンデレンツルマン基督教的紳士として、富豪なる市民として俗界の為にも霊界の為にも寄与貢献する所甚少ならざる好々爺」であると評している。

バークレーや李春生に加えマッカイ宣教師など、細川と交流を持った在台聖職者や信徒は、後に日本基督教会が在台日本人伝道に着手した際に好意的に支援を提供した。細川が一慰問使の立場を超えて、宣教師や台湾人信徒らとの異文化交流において優れた手腕を発揮し、積極的に個人的な親交関係を構築した結果と評価できるのではないだろうか。

このような細川の行動からは、台湾は、支配や教化の対象である「植民地」というよりも、親睦や交流の対象としての単なる異文化領域であるかのようにとのイメージの方が強く感じられる。しかし、細川を含む慰問使らが、台湾で配布していたと思われる慰問状「軍人諸君に呈する書」には、軍人慰問という行為がまさに「優越—劣等」「文明—野蛮」「支配—被支配」の意識と切り離せない性質のものであったことが、如実に示されている。⁽⁹⁷⁾

その内容を見ると、まず天皇が日清戦争を正当化し意味を与える

「叡聖文武」な存在として規定されている。その上で、日本軍は国に實際上の勝利をもたらした「忠実」且つ「勇武」な存在、台湾人は日本軍をてこずらせる「猖獗」且つ「瘁猛」な「釜中の魚」、そして台湾は「炎熱は恰も燬るが如く、風土固有の疫病も亦た殆ど耐え難い」「艱難辛苦」をもたらす「未開なる蛮地」と、規定されるすなわち、「正義」「文明」としての天皇及び日本軍と、それに抵抗する「未開」の台湾人というわけである。

この背後には、日清戦争が「文明」による「野蛮」の征服を目的とした「義戦」であるという、当時の日本キリスト教界における一般的理解がある。注目されるのは、台湾の「猖獗」さや「瘁猛」さが「清兵の比にあらず」とまで強調されることにより、台湾制圧における日本軍の正当性が一層浮き彫りにされている点である。

このような慰問状の精神が細川個人にも浸透していたことは、一八九五年三月の北白川宮能仁出征見送りの際、名古屋のキリスト教徒を代表して細川が奉読したとされる文章により明らかである。

……抑も此の征清の挙たる所謂文明の正直を以て野蛮の不虔を膺懲するの一大義戦なる事は中外与論の相共に称揚する所なり。之を聖經に徴するに「義は国を高くし罪は民を辱かしむ」と云へる言あり。是れ即ち上天の正義に与みして不義を罰するの意なり。而して彼我両国は今日之を實驗して其の真実を証する者

なり。⁽⁹⁸⁾……

(旧漢字は新漢字に、片仮名を平仮名に改めた。句読点引用者。)

文明と野蠻の關係が聖書における「義」と「惡」の關係に譬えられる中、清国との戦争や台湾への武力制圧が完全に肯定されていることがわかるであろう。

もっとも、細川の場合には日正とは異なり、上述のような表現を宣教師や台湾教会関係者らの前で口にしたことを記録している資料はなく、軍人慰問以外の場で語ることはおそらく稀だったと考えられる。或いは、実際に台湾に渡り教会関係者と接触したことが、細川をして一面的な「野蠻」としての台湾観を脱却させたのかもしれない。しかしまた、たとえそうであったとしても、彼の交流相手は英加宣教師や李春生などの「文明的」なキリスト教徒に限られており、台湾キリスト教界に対する印象と台湾全体に対する印象とが、全く別次元でとらえられていた可能性もあるだろう。

結論

日本による台湾武力制圧の過程という非常事態下、台湾キリスト教徒、日本軍関係のキリスト教徒、英加宣教師の三者間に、教会という場を拠点とした異文化交流が持たれたことは、興味深い現象であった。キリスト教信仰という共通の要素が、疑惑や恐怖といった

心理的障壁を取り除き、三者が互いに一種の期待感をもって近づくことを可能にしたといえる。ひとまず、キリスト教の普遍的性格ゆえにもたらされた異文化交流、そして「親交」関係の構築であったと評価することができよう。

その上で、台日キリスト教徒間の関係に關していえば、それは親交的な関係の歪んだ始まりでしかなく、真実の相互理解への可能性は秘めていたものの、そこからほど遠いものだったと結論づけなくてはならない。その最大の理由は、両者に出会いをもたらした植民地支配の構造、すなわち「戦勝者」と「敗戦者」(或いは「支配者」と「被支配者」としての政治的外枠自体を、日本人キリスト教徒が「義」なる前提として正当化していたことである。政治的外枠を相対化するはずのキリスト教の普遍的精神は、日本人キリスト教徒において、文明の代弁者である天皇への信奉に従属し、キリスト教は逆に外枠を正当化するものへと変容していたのである。このため、台日キリスト教徒両者の関係構築において、台湾人キリスト教徒の「主体性」は看過され、その存在は何よりも「敗戦者」及び「被支配者」として規定されていた。

もっとも、未だ文化的言語的障壁の向こう側にいた台湾人信徒が、この段階で日本人信徒のこのようなメンタリティーを既に理解していたわけではない。そして、台湾人が彼らなりの思惑をもって「主体的」に日本人側に近づいていった点もまた、日本人側には理解不

能なことであった。それが、澎湖—日本信徒間で見られた関係性における「擦れ違い」となって現れていたといえる。

日本人キリスト教徒の台湾人に対する優越的態度に対して、彼ら英加宣教師に対しては、同じ立場にある文明の伝達者として対等な態度で臨む傾向があった。日本人キリスト教徒の文明主義的メンタリティーに触れた宣教師側も、それを好意的に評価していたが、もし彼らが、文明の代弁者としての天皇観、そして「台湾人を身も魂も心も日本人にする」統治の論理が、キリスト教徒を支配し得るものであることを明確に知ったならば、どこまで批判し得たのだろうか。

これこそが、一九三〇年代以降宣教師たちが直面することとなる問題の核心であった。そしてこれは、欧米宣教師一般における帝国主義の甘受という問題にも関わってくるのである。⁽⁹⁹⁾

武力制圧の後、台湾へ渡った民間の日本人キリスト教徒は、台湾教会及び英加宣教師の助力を得ながら在台日本人教会を形成していった。しかし、日本人キリスト教徒の「統治者」的メンタリティーが次第に明らかになるにつれ、台湾教会は日本人教会を敬遠するようになり、相互交流への努力にもかかわらず、両者の関係は疎遠化していった。日本人教会と英加宣教師との関係も、ミッション教育などに対する協力提供以外は形式的なものとなっていた。軍国主義の台頭する一九三〇年代以降になると、さらに三者の構図は、英加宣教師が次第に台湾教会の「保護者」的立場から追われる中、代

わりに日本人教会関係者がその役割を担う形となり、台湾教会は日本人教会へ再び近づくことを余儀なくされていた。⁽¹⁰⁰⁾ このように、日本統治時代五〇年間にわたる、日本人キリスト教徒、台湾人キリスト教徒、そして英加宣教師三者の関係は、どちらかといえば否定的なものとなっていくのである。しかし、その起点としての、澎湖における異文化交流の出来事と従軍慰問使の異文化交流体験は、三者が日本統治に対する楽観的な期待を共有する中、未だ相互に肯定的感情を有していた、最も初期の「出会い」の物語だったのである。

注

(1) 本稿は、二〇〇〇年八月に台湾で行われた「第四回日台青年台湾史研究者交流会議」における発表「一八九五年台湾武力制圧の過程におけるキリスト教徒の異文化交流」、及び筆者が二〇〇三年六月に国際基督教大学に提出した博士論文「日本統治下台湾における日本人プロテスタント教会史研究」第一章に、補足訂正を加えたものである。

(2) 先住民民族の中でも平地に居住し、漢化或いは「教化」の度合いが進んでいる者で、清朝時代に「熟蕃」或いは「平埔族」として、漢化の進んでいない先住民民族、すなわち「生蕃」(後に「高砂族」と区別された(伊藤潔『台湾…四百年の歴史と展望』東京…中公新書一一四四、一九九三年、四九頁及び戴國輝『台湾…人間・歴

史・心性」東京：岩波新書四一、一九八八年、六頁参照。

- (3) Campbell, William, *Handbook of the English Presbyterian Mission in South Formosa*. Hastings: F. J. Parsons, 1910. xxxi.
- (4) 台湾基督長老教会総会歴史委員会編『台湾基督長老教会百年史』(台北、一九六五年)、九五頁。
- (5) 本稿では、組織としての「キリスト教会」に対し、ミッション、宣教師、教会、聖職者、信徒、ミッションスクール、キリスト教メディアなどを包括的に含む語として「キリスト教界」という語を用いることとする。
- (6) 同時期に既に渡台していた民間の日本人キリスト教徒もいたが、本稿では軍関係者のみを対象とする。
- (7) 史明『台湾人四百年史』(新泉社、一九九四年)、二七三―二七八頁。
- (8) 「士紳」とは「士人と紳士、すなわち中央・地方の官僚、科挙における生員・挙人・進士など階梯的な学位を保持する者、献金などで中・下級の学位資格を帯びる者・儒学を学ぶ学者階層、退官・補闕の待機などで郷里に在住する者から成り、紳士、郷紳ともいわれる」者のことで、台湾住民の意見を代弁する存在であった。なお、これは斯波義信氏(東洋文庫)よりご教示いただいた。
- (9) 黄昭堂『台湾民主国の研究』(東京大学出版会、一九七〇年)、四八―五〇頁。台湾側は割譲の事実について清朝官僚の台湾巡撫を含めて一切知らされておらず、条約締結後二日が経過した四月一九日になって初めて清朝政府より通告を受けた。
- (10) 注(9) 前掲書、五七―五八頁。
- (11) 注(7) 前掲書、二七三―二七八頁。
- (12) 注(9) 前掲書、五七―五八頁。
- (13) Ion, A. Hamish, *The Cross and the Rising Sun: The Canadian Protestant Missionary Movement in the Japanese Empire, 1872-1931*. Vol. 1. Ontario: Wilfred Laurier University Press, 1990, 173.
- (14) 注(4)『台湾基督長老教会百年史』、九六頁。
- (15) “Cession of Formosa to Japan: Letter from Rev. Wm Gauld” *The Presbyterian Record*, August 1895.
- (16) Report of the Foreign Missions Committee, *Acts and Proceedings of the General Assembly of the Canadian Presbyterian Church* (ナト PCC FMC Report), Appendix No. 6, xxx-xxxii.
- (17) 例えばマッカーイは「日本人兵士や軍夫の多岐にわたる宗教に対して憎悪を示しつつある」と報告しつつある (Letter from G. L. Mackay to R. P. Mackay, Mar. 12, 1896, PCC Box 2 File 23, United Church of Canada Archives ナト UCCA)。
- (18) Letter from G. L. Mackay to R. P. Mackay, Apr. 17 & Aug. 3, 1896, PCC Box 2 File 23, UCCA.
- (19) *The Monthly Messenger and Gospel in China: Presbyterian Church in England*, (ナト Messenger), Dec. 1895, 272, “The Formosan Martyrs”, Ibid., Jan. 1896, 12-14, & [Letter from Ferguson to Matheson, Oct. 30, 1895.] Ibid., Jan. 1896, 6.
- (20) 実際にキリスト者の殺害に関与したのが「住民」の中でもいかなる人々だったのかは、明らかではないが、宣教師が「暴徒」

- (crowdies, mobs, insurgents など)と表現しているのは、一般の住民ではなく、抗日ゲリラに加わっている兵士や清朝兵士で、暴徒と化して一般住民に危害を加えた人々を指すと考えられる。
- (21) *Messenger*, Jan. 1896, 6.
- (22) [Letter from Ferguson to Matheson, Oct. 30, 1895.] *Messenger*, Jan. 1896, 6; *Messenger*, Apr. 1896. 細川瀧『小鱗回顧録』台南、一九二七年、八一頁、一二二―一二三頁など。
- (23) 「台湾近信」『基督教新聞』第六六八号、一八九六年五月二二日。
- (24) 注(22) 細川前掲書、一二五―一二六頁。
- (25) Letter from G. L. Mackay to R. P. Mackay, Mar. 12, 1896, PCC Box 2 File 23, UCCA. (PCC FMC Report 1896: Appendix No. 6, xxx-xxxi.)
- (26) 浅野源二郎「澎湖島宗教事情続」『基督教新聞』、第六二三号、一八九五年七月五日。
- (27) 台湾キリスト教徒が「無意味なる争闘に与みすること」を好まない例としては、注(22) 細川前掲書、一〇二―一〇三頁を参照。
- (28) 張季琳・古偉瀛〈附録 李春生相関大事年表〉(《李春生的思想與時代》一九九五年)を参照。
- (29) 吳文星〈清季李春生的自強思想―以変革図強議論を中心〉、注(28) 前掲書、一四二―一四三頁。
- (30) 清朝末期に康有為らが起こした政治改革運動。日清戦争の敗北を受け、日本の明治維新を手本にして国会を開き、憲法を制定して立憲君主制を樹立するという政治改革(変法)を主張したが、西太后らによる戊戌の政変で頓挫した。
- (31) 古偉瀛〈従棄地遺民到日籍華人―試論 李春生的日本経験〉、同上書、一六六―一六七頁。
- (32) 許世楷『日本統治下の台湾』(東京大学出版会、一九七二年)、四八頁。
- (33) 同上、一七〇―一七一頁。
- (34) 注(29) 前掲論文、一五九頁。
- (35) 黄俊傑・古偉瀛〈新恩與旧義之間―李春生的国家認同之分析〉、李明輝編《李春生的思想與時代》台北：正中書房、一九九五年、一四四、二二一、二三二頁。注(29) 前掲論文、一四二―一四三頁。注(31) 前掲論文、一六六―一六七頁。
- (36) 注(22) 細川前掲書、一六八頁。
- (37) 注(32) 前掲書、五六頁。
- (38) "The Japanese Occupation of Taiwanfoo - Rev. Duncan Ferguson, MA," *Messenger*, Jan. 1896, 11-12. 及び "Our Missionaries and the Occupation of Taiwanfoo," *Messenger*, Jan. 1896, 10. なお、井川直衛『バアクレイ博士の面影』(基督教真理社、一九三六年)、一四七頁及び一三四―一四一頁にファーガソンの報告の日本語訳、一三〇―一三一頁にバークレーの懐旧談が記載されている。
- (39) E P M 初代医療宣教師ジェームズ・マクスウェルは、住民とトラブルを起こした経験から、宣教上の問題を英国領事に訴えないことに決めており、後代の宣教師も領事館とは一定の距離を保っていたようである。
- (40) Ede, George, "Formosa: Cession to Japan", *Ibid.*, Jul. 1895,

- (41) Band, Edward, *Working His Purpose Out: The History of the English Presbyterian Mission 1847 - 1947*. Reprinted ed. Taipei: Ch'eng Wen Publishing Company, 1972, 126.
- (42) "Formosa: Past and Present — Rev. William Campbell," *Messenger*, Apr. 1896, 84-5.
- (43) 駒込武『文明』の秩序とミッション・イングラント長老教会と一九世紀のブリテン・中国・日本」(近代日本研究会『地域史の可能性: 地域・日本・世界』近代日本研究年報一九、一九九七年)、二八頁。
- (44) 駒込武は同じバークレーの報告書に対して、彼の日本支配に対する評価が「否定と肯定の間を揺れ」ていた(注(43) 前掲論文、二八頁)と述べ、どちらかという肯定していた側面を強調するが、筆者は、バークレーは日本統治の到来による形式的な変化は期待できたとしても、統治政策の本質に関わる部分には疑問を持たざるを得ないという立場であったと解釈する。
- (45) PCC FMC Report 1896, Appendix No. 6, xxviii.
- (46) Mackay, George L., *From Far Formosa: The Island, its People and Missions*. 2nd ed. Toronto: Fleming H. Revell Company, 1895, 337.
- (47) 『マッカーイ日記』(Journal by George Leslie Mackay) 第二一巻(英文: 一八九四年六月—一八九八年六月、さらに本国への報告書でも乃木による治世が公義に基づくものであると評価している(PCC FMC Report 1897: 172; ibid. 1898: 184)。
- (48) 一八九六年十一月の乃木との会見以来、マッカーイは二月八日に乃木、二月三〇日に水野夫妻による訪問を受け、一八九七年三月四日及び六月一七日には乃木邸晩餐会に招待されている(『マッカーイ日記』)。
- (49) 『マッカーイ日記』第二一巻、一八九六年一〇月二三日。
- (50) 例えば近衛師団は台北—新竹間の抗日軍討伐のため沿道の住民を敵味方に関係なく掃討した(注(32) 前掲書、五〇頁)。またマッカーイも教会を含めた村全体が焼き討ちに遭い草しか残っていない村のことを報告している(Letter from G. L. Mackay to R. P. Mackay, Oct. 7, 1896, PCC Box 2 File 23, UCCA)。
- (51) ただしここで筆者は澎湖住民が「台湾人」を代表する存在であるとは考えていない。澎湖は一六八四年に至るまで台湾より独立した行政区域だったため、日本人と接触した際は「澎湖人」としての意識で対応したと考えられる。なおこの点については、台南神学院基督教社会研究所元所長の鄭兒玉牧師よりご指摘いただいた。
- (52) 注(5) 前掲書、一五一—一六頁。
- (53) "One in Christ," *Messenger*, Aug. 1895, 172-73.
- (54) 〈澎湖的消息〉《台南府城教会報》第一二二号、一八九五年五月、三九頁。なお、この時期の台南府城教会報中の日付は旧暦に基づくため、文中には呼応する新暦の日付を記載した。
- (55) 比志島支隊は、台湾島制圧の兵力増強のため基隆に来るようという五月三一日付の総督命令を受けて、六月三日、一部を守備のために残して馬公を離れた(参謀本部編『明治二十七八年日清

- 戦史』第七卷、五三一―五四頁。
- (56) 「澎湖島宗教事情」『基督教新聞』第六二二号、一八九五年六月二八日、「澎湖島宗教事情 続」。
- (57) 「澎湖島宗教事情」。
- (58) 〈澎湖的消息〉、三九頁。
- (59) 一八五一年、アメリカ人宣教師 John V. N. Talmage 及びその「アモイ人同労者楊牧師」によって創出されたローマ字による閩南語の表音システム（鄭兎玉「台湾のキリスト教」『アジア・キリスト教史「I」』教文館、第三版一九八九年、所収、八八頁）。
- (60) 「澎湖島宗教事情」。
- (61) 同上。
- (62) 「澎湖島宗教事情 続」。
- (63) 同上。
- (64) “One in Christ,” Ibid.
- (65) 〈澎湖的消息〉、三九頁。
- (66) 同上。
- (67) 日本軍の態度は、一八七四年に澎湖を一時的に占領したフランス軍よりも悪いと澎湖住民には評判が悪かった（許廷芳五月二日〔新曆五月二五日〕付書信、〈澎湖的消息〉に記載）。
- (68) 「澎湖島宗教事情 続」。
- (69) “One in Christ,” Ibid.
- (70) 前田成文は、異民族支配における文化摩擦に関し、表層的な言語などの差異に気付いたにとどまり、深層におけるより大きな差異が気付かれない「擦れ違い現象」が起ることを指摘している。
- 「差異の文化論」（石井米雄編『差異の事件誌―植民地時代の異文化認識の相克―』巖南堂書店、一九八四年、所収）九―一〇頁参照。
- (71) 「澎湖島宗教事情 続」。
- (72) この点は、中国文化には「忠義」という言葉はあっても「愛国」という概念はない、という点と併せ、鄭兎玉牧師よりご指摘いただいた。
- (73) 大本営と同じく広島に本部を設置していた超教派のキリスト教組織。日清戦争中も従軍慰問使を派遣している。
- (74) 「基督教徒たる慰問使台湾に向かわんとす」『福音新報』第二二〇号、一八九五年五月三十一日。
- (75) 「台湾島への慰問使派遣の件」『基督教新聞』第六二〇号、一八九五年六月七日、及び「台湾慰問使の件」同第六二三号、七月五日。
- (76) 注(22) 細川前掲書、七五―七六頁。
- (77) 細川の従軍日程については明記のない限り『小鱗回顧録』による。
- (78) 〈細川牧師的教示〉《教会公報》第一三四号、一八九六年七月、五三一―五五頁。
- (79) 注(22) 細川前掲書、八一―八二頁。
- (80) 「台湾に於ける基督教徒」『福音新報』第二〇号、一八九五年一月十五日。
- (81) 注(22) 細川前掲書、一〇二―一〇三頁。
- (82) 同上、一五四―一五九頁。

（飛田良文ほか編『アジアにおける異文化交流』明治書院、二〇〇四年、二一〇—二三三頁）を参照。

- (83) 同上、一二二—一二五、一三〇頁。
- (84) 同上、一一八—一九頁。
- (85) 同上、一六四頁。
- (86) 同上、一一九—一二〇頁。
- (87) 同上、一三一—一三二頁。
- (88) 同上、一六〇頁。
- (89) 同上、一六一—一六四頁。
- (90) 同上、一六五頁。
- (91) 同上、一三一—一三二頁。
- (92) 同上、一四八頁、及び『福音新報』第六〇号、一八九六年八月二一日。
- (93) 同上、九六頁。
- (94) 同上、一四八頁。
- (95) Letter from Barclay to Dale, Aug. 6, 1896, Presbyterian Church of England Series IV Box 2 File 2, School of Oriental and African Studies, University of London.
- (96) 注(22)細川前掲書、一五九—一六九頁。
- (97) 同上、一一四—一六頁。
- (98) 同上、一〇七—一〇八頁。
- (99) 在台宣教師の帝国主義的性格については、注(43)前掲の論文、及び駒込武「台南長老教中学神社参拝問題—踏絵的な権力の様式—」(『思想』九一五号、二〇〇〇年九月)などを参照。
- (100) この時期の両者の関係については拙稿「日本統治下台湾のキリスト教界における異文化交流—台湾YMCAの事例を中心に—」